



PRESS RELEASE

2018年3月1日

六本木ヒルズ 15周年

～これからも更に進化し続ける、文化都心の先駆け～

多様な都市機能を集約したコンパクトシティの先駆けである六本木ヒルズは、2003年に「文化都心」として誕生、2018年4月25日で開業15周年を迎えます。

六本木ヒルズは、世界をリードする都市に欠かせない「文化」の都心を東京につくるべく、現在ではすっかり定着している、オフィスや住宅、商業施設を複合的に開発する街づくりと、多様な用途の施設をひとつの街として運営するタウンマネジメントの手法により、開業以来、多様な人々が暮らし、働く、経済と文化が融合した街を育んできました。

開業15年で、街のシンボルとして森タワーの最上層部に設置した森美術館は、アジアを代表する現代美術館に成長。以来、六本木エリアには多くの美術館やギャラリーが集積され、「六本木アートナイト」も開催されるなど、東京を代表する文化の拠点となりました。同時に、街を育むために、様々なコミュニティ活動を継続的に仕掛け、街を舞台にした多様な学びの機会も提供してきました。

また、ここ数年は、六本木ヒルズ10周年を機に立ち上げた、都市と未来のライフスタイルを議論する国際会議「INNOVATIVE CITY FORUM」を継続的に開催しているほか、「MITメディアラボ」との都市のあり方に関する共同研究をスタート、さらに六本木ヒルズを舞台にしたAIなど先端テクノロジーの実証実験にも取り組むなど、次世代の街のあり方の提案に注力しています。

このように、新鮮な情報発信やライフスタイルの提案を積み重ねた結果、六本木ヒルズは、時代の最先端に出会える街として国内外で広く認知され、開業以来毎年約4,000万人が訪問、この15年間の来街者は6億人に達する見込みです（2018年3月1日現在）。

六本木ヒルズは、これからも、世界中から多様な価値観、文化、感性、技術を持った人々や企業を迎え入れ、新しい磁力を創発する街を目指して、さらに進化して参ります。



六本木ヒルズの15年間 ～街を育むタウンマネジメント～

六本木ヒルズは、職・住・遊・学・憩…等の多様な都市機能が集積したコンパクトシティの先駆けとして誕生。その複合機能を活かし、個別の施設にとどまらず、街全体の視点をもった「タウンマネジメント」を運営の核として、常に「文化の発信」「人と人のつながりをつくり、コミュニティを育む」「都市の未来の可能性を広げる」といった視座で街づくりに取り組んできました。開業から15年、六本木ヒルズでは、人と人が出会い、そのつながりから新たな活動などが着実に生まれています。また、これら絶え間ない仕掛けと発信が、街自体のブランド、メディアとしての価値を生み出し、六本木ヒルズが先駆的に取り組んだこの「街のメディア化」が、六本木ヒルズの挑戦、展開を支えています。これら六本木ヒルズのタウンマネジメントは、近年の複合開発における運営・事業モデルともなっており、各所のより積極的な街づくりを後押し、東京の都市力の向上に寄与しています。

文化の発信 ～アジアの文化都心を目指して～

六本木ヒルズの文化発信の中核である森美術館は、この15年間でアジアを代表する現代美術館として国際的評価を受けるまでになりました。開業以来、ART&LIFEをテーマに、アートの裾野を広げる活動にも積極的に取り組み、2009年に始まった一夜限りのアートの饗宴「六本木アートナイト」は、昨年8回目を迎え、約74万人が参加する東京を代表するアートの祭典となりました。

六本木エリアでは、2003年の森美術館開業以降、2007年には国立新美術館、サントリー美術館、21_21 DESIGN SIGHTがオープン。さらに、六本木ヒルズに近接するピラミデビルには、ギャラリーペロタンをはじめ、世界を代表するギャラリー6店舗がそろう、2016年にはグローバルに活動する現代美術ギャラリーなど4店舗を集積した「complex 665」が開業するなど、アートや文化の集積化が進み、日常生活の中でアートを身近に感じていただける機会が格段に増えました。また、これらのノウハウやネットワークは、六本木ヒルズにとどまらず、虎ノ門ヒルズやGINZA SIXなど、他のエリアや施設でも応用されており、東京の文化コンテンツの強化に貢献しています。



©六本木アートナイト実行委員会

15年で育まれた、多様な都市のコミュニティ

約400世帯の地権者の方々との再開発事業である六本木ヒルズは、元々の地域コミュニティを土台に、ワーカーや新たな居住者が加わって現在のコミュニティを形成してきました。六本木ヒルズ自治会は、こうした背景をふまえ、居住者だけでなく、オフィス、店舗、テレビ局、ホテルなど六本木ヒルズを構成する面々が参加していることが特性です。毎月1回開催される「六本木クリーンアップ」は、六本木ヒルズで最も長く続く自治会主催のイベントで、これまで140回以上、延べ16,500人以上が参加しました。また同じく自治会主催の「盆踊り」は、近隣の麻布十番商店街と連携して毎年開催され、様々な国籍の人々がやぐらを囲んで踊る夏の風物詩となっています。

様々な都市機能が集積する六本木ヒルズでは、自治会だけでなく、テーマの異なる多様なコミュニティが生まれています。森美術館やアカデミーヒルズなど施設の活動を通じたコミュニティのほか、屋上庭園の田んぼで行われる「田植え」や「稲刈り」、「もちつき」、仕事前の朝の時間に様々な人が集まりつなぐことを目的とした「ヒルズブレックファスト」等、特徴ある継続イベント毎にもコミュニティが誕生しています。こうした人々のつながりと、そこから生まれる新しい展開こそが六本木ヒルズが15年かけて育んできたものであり、現在では多くが自律的に運営され、次世代のリーダーや新しい活動も生まれています。





未来をつくる「学び」を、街を舞台に提供

六本木ヒルズは、未来の都市の担い手である子どもたちの育成や、街を舞台にした学びの機会を大切にしてきました。夏休みには「KIDS' WORKSHOP」を開催、六本木ヒルズに入居するテナント企業や店舗の協力を得て、法律事務所による模擬裁判や、グランド ハイアット 東京のシェフによる料理教室など、ここでしか体験できないプログラムを用意し、2017年には71種 311講座を実施、3,000人以上が参加しました。また、会員制ライブラリーと社会人向けのスクールを擁する「アカデミーヒルズ」では、ビジネスパーソン向けのセミナーなどを年間約100本開講、2007年にスタートした「六本木ヒルズのヒミツ探検ツアー」では、今までに延べ1万人が参加し、六本木ヒルズの舞台裏を探検しながら、次世代の都市のあり方を考えてきました。

これらの学びの機会は、2015年には、MIT メディアラボとの共同研究で培ったノウハウやネットワークを駆使し、未来の主役である子どもたちがプログラミングなど先端技術を学ぶ「MIRAI SUMMER CAMP」が新たに加わるなど、常に進化しています。



ヒルズから未来の都市のあり方を提案

世界人口の6割が都市部に集中し、都市のあり方が世界的な課題になる現代にあり、近年、特に強化している取り組みが、未来の都市のあり方やライフスタイルの提案です。2013年には、六本木ヒルズ10周年を記念して、都市とライフスタイルの未来をテーマにした国際会議「INNOVATIVE CITY FORUM (ICF)」をスタート、世界中から、都市開発、先端技術、アートやデザインの分野をリードするトップランナーを招聘し、議論を重ねています。毎年10月に開催し、今までの5回で延べ213人が登壇、1万人を超える人々が参加しました。また、2014年には、MIT メディアラボと、都市のあり方に関する共同研究をスタート、AI、バイオテクノロジーなど、最先端の技術がどのように都市に作用するのか、リサーチを続けています。さらに、多様な都市機能を集約したコンパクトシティだからこその一箇所で完結できる、様々な実証実験もスタート、2017年にはZMPによる自動走行の宅配ロボットの実証実験を行いました。





各施設の状況

森美術館

六本木ヒルズの象徴である森美術館は、「国際性」と「現代性」をミッションに掲げ、アジアを中心とした世界の多様なアートの動向を紹介すべく、開館以来 52 本の展覧会を開催しています。

近年では、現代アートの巨匠、アンディ・ウォーホルの国内史上最大の回顧展「アンディ・ウォーホル展：永遠の 15 分」(2014 年)や、国内では空前絶後と評された村上隆の大規模個展「村上隆の五百羅漢図展」(2015 年)など、森美術館ならではのダイナミックな展覧会を開催しました。また、ポンピドゥー・センター・メスとエルメス財団との共同企画展「シンプルなかたち展」(2015 年)の開催や、「宇宙と芸術展」(2016 年)の国際巡回など、世界の主要な美術館や機関との協働を果たし、アジアを代表する現代美術館として国際的なプレゼンスを一層高めています。

2015 年には施設の改修工事を行い、展示空間を高機能化。新たに収蔵品を企画展示する「MAM コレクション」、特定の作家や動向の調査に基づく資料展示「MAM リサーチ」、シングル・チャンネルの映像作品を上映する「MAM スクリーン」の 3 つのプログラムをスタートし、展覧会プログラムの複層化を図りました。2017 年には、教育普及活動を「パブリックプログラム」から「ラーニング」へと改称。対話や体験を通して観客とともに学ぶ、双方向的な「学び(ラーニング)」と再定義し、美術館が街の中へ飛び出し、コミュニティとつながる「まちと美術館のプログラム」を立ち上げるなど、美術館と観客の新しい在り方を拓くさまざまな取り組みに挑戦しています。

また、2006 年から国立新美術館、サントリー美術館と継続している地域協働の取り組み「六本木アート・トライアングル」をはじめ、一夜限りのアートイベント「六本木アートナイト」、虎ノ門ヒルズや GINZA SIX を飾るパブリックアートの監修など、美術館のモットーである「アート&ライフ」—現代アートをより身近なものに—の実現に鋭意努めています。

東京シティビュー

森タワー 52 階/屋上に位置し、東京タワー、東京スカイツリーの他、東京の中心から名所を、また天気の良い時には富士山までも見渡せる展望台「東京シティビュー」。とりわけ屋外展望台としては関東随一の高さ(海拔 270m)からのダイナミックな景色や空、風、星を体感できる屋上の「スカイデッキ」は、トリップアドバイザーで上位に選出されるなど、東京に欠かせないトラベルデスティネーションとして国内外から多くのお客様を迎えています。外国人割合は多い時で 70%にも及び、夕陽の名所としても脚光を浴びています。

52 階の屋内展望台は、2015 年に大規模な改修を行い、展望台の魅力はそのままに、様々な展覧会も開催できるようリニューアル。また新たに森美術館が監修するアートと眺望を存分に楽しめるミュージアムカフェ&レストラン「THE SUN & THE MOON」が同フロアにオープンしました。改修後は、「スター・ウォーズ展 未来へつづく、創造のビジョン。」(2015 年)から始まり、「美少女戦士 セーラームーン展」、「ジブリの大博覧会～ナウシカから最新作「レッドタートル」まで～」(2016 年)、「マーベル展 時代が創造したヒーローの世界」、「ブルガリ セルペンティフォーム アート ジュエリーデザイン」(2017 年)、など、映画、漫画、ジュエリーなど幅広いジャンルの展覧会を、展望台ならではの「景色との融合」を意識しながら開催しています。



村上隆《五百羅漢図》(部分) 2012 年
展示風景：「村上隆の五百羅漢図展」森美術館、東京、2015 年 撮影：高山幸三
© Takashi Murakami / Kaikai Kiki Co., Ltd. All rights reserved



おやこでアート ファミリアワー風景
「サンシャワー：東南アジアの現代美術展」2017 年
撮影：御厨慎一郎





また、屋上スカイデッキでは、360 度遮るものなく東京の空を広く見渡せる特性を活かし、毎月第 4 金曜日を「六本木天文クラブの日」として天文の専門家の解説を聞きながら天体望遠鏡で星空を観望する「星空観望会」を実施するなど、定期的なイベント開催でコミュニティも創出しています。日本で随一の眺望を存分にお楽しみいただくことはもちろん、様々な取り組みを通じて、景色だけでなく面白さを持つ、国内外から何度も足を運びたいスポットとなることを目指しています。



森アートセンターギャラリー

森タワー52 階にあり、約 1,000 平米の広さを誇る森アートセンターギャラリーは、基本的には主催者への貸ギャラリーとして運営しています。展覧会内容に応じて自在に表情を変えられるギャラリー空間を活かしながら、様々な展覧会を開催しています。40 万人を超える動員を記録した「ハリー・ポッター展」(2013 年)、「連載完結記念 岸本斉史 NARUTO-ナルト-展」(2015 年)、「ヴェルサイユ宮殿《監修》マリー・アントワネット展 美術品が語るフランス王妃の真実」(2016 年)、「大エルミタージュ美術館展 オールドマスター 西洋絵画の巨匠たち」(2017 年)、「THE ドラえもん展 TOKYO 2017」(2017 年～2018) など、漫画・アニメ作品、映画、ファッション、デザインから世界の美術館の貴重なコレクションの企画展まで、多彩で質の高い展覧会が開催されています。



アカデミーヒルズ

アカデミーヒルズは、1986 年にアークヒルズで生まれた「アーク都市塾」を起源に持つ 社会人向けの教育機関です。組織や会社を離れた“自律的に自立する個人の支援”をミッションに、スクール事業として年間約 100 件のプログラムを実施するほか、会員制ライブラリー事業、そして国際会議やビジネスイベントに対応するフォーラム事業の 3 つを軸に活動しています。



スクール事業: ビジネススキルにとどまらず、アートや教養などの多ジャンルに渡り自分を磨き、知識を積極的に自分から取りにいくビジネスパーソン向けの新しい学びのスタイルを目指し、長期受講型のスクールや、1 回完結のワークショップなど、さまざまな受講形態で「創造」「交流」「発信」しています。



会員制ライブラリー事業「六本木ヒルズライブラリー」: 組織を離れて自律した個人が、知識や情報を交換する会員制ライブラリーは、席数 326、約 12,000 冊の旬な書籍を館内に配架、セミナーや交流会、サークル活動などもあり、志を同じくするメンバー3,100 名が在籍しています。

フォーラム事業: 東京を代表する情報発信(MICE)の拠点として、グローバル企業のフォーラムや、国内外の政府機関による国際会議など、15 年間で合計約 25,000 件近くの多様なイベントを開催、延べ約 510 万人の方が来館しました。2014 年には、東京都の「ビジネスイベント先進エリア」の指定を受け、地域で「Destination Marketing Organization (DMO)六本木」を立上げ、積極的に MICE の誘致、受入を行っています。





六本木ヒルズクラブ

六本木ヒルズクラブは、人的交流の拠点として、様々な分野で活躍されるインフルエンサーの方々が集い、食を通じて対話を愉しみ、新しい文化を発信する拠点となることを目指す会員制クラブです。現在、約 3,800 名と過去最高の会員をお迎えしています。



レストランとしての機能は勿論、会員相互のネットワーキング機会を創出してきました。時代の先端を行くインフルエンシャルなゲストスピーカーを招聘し、2017 年に 100 回目を迎えた「ランチョンセミナー」や、総支配人主催の「メンバーズカクテル」、ゴルフ、ワイン、アートなど、興味に合わせて参加いただく「クラブ・イン・クラブ(同好会)」を開催。特にゴルフ同好会では、年に数回のゴルフコンペを開催し、発起人を中心として、会員相互の交流を深める機会として発展してきました。

また、2017 年には、フレンチヨーロッパダイニング「ザ ホライズンルーム」とバー「ザ スターバー」のリニューアルを実施し、パーティーユースにも対応できる施設としてご好評をいただいています。

グランド ハイアット 東京

グランド ハイアット 東京は、ダイナミックでスタイリッシュな空間と充実の施設が特徴のライフスタイルディスティネーションホテルとして、個性あふれる直営の 10 のレストラン・バー、宴会場施設、客室が究極のくつろぎと感動を創出してきました。



2017 年度の宿泊稼働率は約 9 割、特に訪日客の割合が約 7 割と過去 5 年間で約 1 割増加しました。また、この数年、客室のリノベーションをはじめ、1,000 m²のボールルーム、2 階および 4 階宴会場や婚礼サロンの改装を行い、バンケットエリアが全体を通して洗練されたレジデンスデザインと、日本のホテルでは初となる 2,400 個の特注ペンダントライトなど最新鋭の技術による機能性を併せ持つ空間へとさらにダイナミックに生まれ変わりました。

加えて、ライフスタイルを提案するホテルとして、ホテル業界初のディスコイベントを、華やかな経済を経験したバブル世代をターゲットに、10 年間で 28 回開催。今では 1,000 名以上を動員する大型ディスコイベントにまで成長し、ホテルディスコのパイオニアとして注目されています。さらに、今年開業 15 周年を迎えるのを機に、シグネチャーレストランであるステーキハウス「オーク ドア」では「ノスタルジー」をテーマに、よき雰囲気と記憶を引継ぎながら、人々、そして過去と未来をつなげ、温かみと落ち着きのある空間へと進化。これからも「期待以上の体験、想像以上の感動」をお届けするマーケットリーダーとして、グランドハイアット 東京ならではのスタイルで、新たな価値を創造していきます。

TOHOシネマズ 六本木ヒルズ

TOHOシネマズ六本木ヒルズは、開業から現在に至るまで 15 年に渡り、数々のジャパンプレミアや舞台挨拶を開催し、年間 200 近くのイベント会場となっています。



2015 年には大幅リニューアルをし、メインスクリーンであるスクリーン 7 番に、独自規格の巨大スクリーン「TCX®」や、最高級の音響を体験できる「ドルビーアトモス」、ゆったりとした空間で映画をご鑑賞いただける「プレミアム ラグジュアリー シート®」を導入。多くのお客様からご好評をいただいております。また、アトラクション型 4D シアター「MX4DTM」も導入し、より幅広いお客様にご来場いただいています。

15 周年を迎える今年、「プレミアム ボックス シート®」を通常スクリーン全てに導入し、今まで以上に上質な、ワンランク上の映画体験をご提供します。



商業

六本木ヒルズの商業エリアは、それまでショッピングの拠点がなかった六本木に、ここにしかないオリジナリティやクオリティを追求した「ONE&ONLY」をコンセプトとし、飲食や物販・サービス店舗約 200 店で構成される新たな一大商業拠点を生み出しました。以来、港区を中心とした都心居住者に向けて新たな価値を提案し続けています。



2016 年には、新たなメンズファッショントレンドの情報発信地として、都会的な大人の男性をイメージした、上質で洗練されたメンズファッションゾーンをオープン、また 2017 年には、ロレックス、グッチ、サンローラン、カルティエが新たに出店し、ラグジュアリーブランドをさらに集積。また、オフィスワーカーの利便性向上を目指し、ワークスペースとカフェで構成された「パーク 6」を中心にワーカーサポートショップをウェストウオーク 6 階に集約するなど、社会動向や顧客ニーズを踏まえたリニューアルを行い、他にない魅力の醸成、鮮度の維持と顧客満足度の向上に努めてきました。

コンセプト「ONE&ONLY」を積み重ねた結果、2017 年には開業以来、最高売上を記録(2017 年 1 月～12 月)するなど、好調に推移。また、ヒルズカードで年間税別 300 万円以上お買い上げの顧客向けに「4 スタープログラム」をスタートし、ジョエル・ロブションと小野二郎(すきやばし次郎)の両氏によるスペシャルディナーなど、六本木ヒルズならではの高付加価値なサービスを提供。東京の商業施設をリードし続けています。

オフィス

六本木ヒルズには、2003 年のオープン当時都心部で最大規模であった 1,360 坪の巨大プレートが特徴の森タワーをはじめ、クロスポイント、ゲートタワー、けやき坂テラス、ノースタワーの 5 棟のオフィスビルがあります。時代に先駆けたスペックの大規模から小規模まで多様なニーズに応えるオフィス環境があります。



また、展示会や国際会議等が開催可能な大小様々なボールルームやフォーラム、国内外からの VIP をお迎えする格式高いホテル、出張者が短期滞在できる快適なサービスアパートメントなど、様々な都市機能を複合した六本木ヒルズは入居企業のビジネスをあらゆる面で強力にサポートしています。さらに、ワーカー個人が六本木ヒルズで過ごす時間を自由でより豊かなものにするため、森ビル運営施設の約 350 店舗が様々なベネフィットメニューを提供し、ワーカー同士の交流を促すフットサルやゴルフコンペなどのコミュニティプログラムなど、ワーカーに焦点を当てたサービスを独自にいち早く導入してきました。

このような取り組みが高く評価され、現在は金融や IT で世界をリードするグローバルカンパニーや、成長著しいスタートアップ企業など 121 社(日系 89 社、外資系 32 社)が入居、多彩な業種と国籍のワーカーが日々約 2 万人就業しています。六本木ヒルズに拠点を構える上場企業の時価総額は約 265 兆円(※)に上り、まさに日本経済のエンジンになっています。

※2018 年 2 月 16 日時点の時価総額を元に、外資系企業は本国親会社の時価総額を元に算出。



六本木ヒルズレジデンス(住宅)

六本木ヒルズレジデンスは、当社が提案する東京の新しいライフスタイル「MORI LIVING」のフラッグシップとして誕生しました。オンとオフが限りなくボーダレスになる時代には、日々の交流や遊びの中からビジネスのヒントが見つかり、暮らしの場を離れずとも仕事や知的交流ができるようになる。「MORI LIVING」が目指すのは、そんな「空間」と「時間」、「環境」を提供することです。

六本木ヒルズレジデンスは、美術館、ホテル、映画館、スパなど、ユニークで上質な「ヒルズとしての住環境」を備え、加えて、これまでにない高層住宅建築の美しさや、特別なサービス、上質なホスピタリティなどが開業以来、高い評価を得てきました。

合計 800 戸の住宅の内、賃貸住宅約 460 戸の稼働率は約 9 割。このうち約 4 割は、海外からの居住者で占められています(※)。賃貸住宅から退去される多くのお客様から「次に戻ってくる時は必ず MORI LIVING を選ぶ」と仰っていただいていることは、私たちの何よりの勲章です。



15 周年を迎えた今もなお、時代に合わせて進化し続ける街とともに成長を続ける六本木ヒルズレジデンス。今やアークヒルズ 仙石山森タワーや虎ノ門ヒルズなど、全 26 棟・約 3,740 戸(約 550 戸のサービスアパートメントを含む)に広がる「MORI LIVING」の礎となった六本木ヒルズレジデンスは、これからも「MORI LIVING」のフラッグシップであり続けます。

※2018 年 1 月末時点

◇本リリースに関するお問合せ先◇

森ビル株式会社 タウンマネジメント事業部
担当：山崎、渡邊、山村
TEL：03-6406-6350 FAX：03-6406-6483

株式会社プラップジャパン
担当：中野、須藤
TEL：03-4580-9101 FAX：03-4580-9151